



学校だより

7月号

令和3年6月30日

～ まちのみんな ひとつになあれ ～



「役割」

学校長 後藤 直樹

6月14日、関東地方は梅雨入りとなりました。しかし、爽やかな風が吹き抜ける日があるかと思えば突然、食洗器の中を思わせるような土砂降りとなる日もあり、今まで私たちがイメージしている梅雨とは少し違う気がしました。

さて、この梅雨が明ける頃には夏休みとなります。今年度も3か月が過ぎ、コロナ禍の中でも子どもたちは落ち着いた学校生活を送っています。特に目を引かれるのは、当たり前的事として、毎日の委員会活動に取り組んでいる5・6年生の子どもたちです。1日の学校生活の中で自由に使える時間はそれほど多くはありません。担当の曜日を決めて分担しているようですが、そんな貴重な休み時間を使って、集会の準備をしたり、飼育小屋をきれいに掃除したり、給食の時間に流す朗読の練習をしたりと、その役割はそれぞれです。しかし共通していることは、どの子も生き生きと取り組んでいる点です。これら高学年の委員会活動に限らず、クラスでの係活動や給食の配膳や掃除などの当番活動にもしっかりと取り組む子どもたちの微笑ましい姿が見られます。

ある講演会での心理学の先生のお話が頭に浮かびました。その内容は、哺乳動物はトラなどのように繁殖期以外は一匹で行動する動物と、オオカミなどのように群れをつくって生活する動物とに大別されるそうです。この分類によると、人間は後者の「群れをつくる動物」に属します。そして更に群れをつくる動物の心理的な部分の特徴として、集団の一員として、「役に立っている」「皆に必要とされている」と感じたとき「幸福感」を味わうことができるというお話でした。オオカミの子孫である犬が褒められることに喜びを感じ、飼い主に忠実な行動をとろうとするのも、こうした心理からだということです。犬と子どもたちと一緒に語ってはいけませんが、皆に必要とされ、その役割を果たそうとしている子どもたちは確かに生き生きと見えます。そしてさらに、周囲からの「ありがとう」という感謝の言葉は自己有用感と次への意欲にもつながります。朝会では子どもたちに学校を「ありがとう」という言葉でいっぱいにして欲しいと投げかけました。



昼の放送の様子